

2020/9/7

(うとQ世話し 痛切に)

若いころ読んだ本で、書かれた方がどなただったのか、はたまた何という題名の小説だったのかはまるで覚えておりませんが、ある末期がんを患った老夫が病院のベッドで、その痛み

に耐えかねて嗚咽を漏らした時、その患者さんの年老いた奥さんが「何も言わず黙ったまま、何度も何回も夫の背中をさすっていました。そうするよりほかに慰める(痛みを和らげる?)手立てがなかったのです(手立てを思いつかなかったのです?)」

というような一文がありました。その一節を目にした折、それまで読んだ、どの本より、ここに「ずっしん」とくるような、深く、重たい感銘を受けました。

今日、不図、何故か、長らく忘れていたその一節を思い出して

「答えは見つからずとも、そのようなことが自然にできるひとになれたらいいなあ」と思いました。

自分に今一番欠けているものは「それだなあ」と痛切に思いました。

追記)

本日より「うとQブログ」改め「うとQ世話し」に改名いたします。

理由は「何となく」でございます。